

アメリカ商業銀行による割賦返済方式の導入 - 貸出の換金可能性と銀行流動性

松山大学 掛下 達郎

Keynes の流動性選好説を修正しようとした Hick (1989) は、「銀行貸出は(証券)投資ほど流動的ではない」(p. 61)し、「貨幣への交換可能性の観点を除いては流動性を定義できない」(p. 42)と考えた。この見解によると、銀行貸出の貨幣への交換可能性が銀行流動性を左右することになる。川合 (1965) は、銀行貸出の回収、貨幣の回収が商品価値の実現、その実現の流動性によって究極的に規定されるとした。Keynes, Hick (1989) と川合 (1965) の流動性概念は異なっているが、流動性を考える際に貨幣を重視している点では一致している。さらに、川合 (1965) は実現の流動性の違いに着目して銀行貸出を分類し、それぞれの貸付一回収による銀行券の還流を考察している(pp. 166-170)。

本報告では、川合 (1965) を参考にしながら、アメリカ商業銀行の銀行貸出を消費者貸付、住宅モーゲイジ貸付、ターム・ローン、商業モーゲイジ貸付、農業モーゲイジ貸付に分類して、それぞれの銀行流動性、銀行貸出の換金可能性、貸付一回収を考察する。

現在のアメリカ商業銀行の消費者貸付と住宅モーゲイジ貸付では、借り手である給与所得者の所得期間を反映して、月々の完全割賦返済が主流である。これらの貸付の場合には、預金設定による銀行貸付と個人所得部分からの月々の回収(還流)がおこなわれる。

同じくターム・ローン、商業モーゲイジ貸付、農業モーゲイジ貸付の割賦返済では、借り手企業の生産期間と流通期間、農民の所得期間を反映して、月々ではなく四半期、半年、1年といった回収間隔の場合が多い。これらの貸付は完全割賦返済だけではなく、とくにターム・ローンでは回転信用との併用や満期時に最も大きな支払いをするバルーン・ノートの利用も多い。回収間隔が長く一定していないのである。

本報告では、アメリカ商業銀行が割賦返済方式を導入したニューディール期まで遡って、銀行貸出の換金可能性と銀行流動性を考察する。これによって、割賦返済方式が銀行流動性にどのように影響しているかを検討する。それとともに、自己流動性論→転嫁流動性論→期待収益説という銀行流動性の理論史を再検討して、割賦返済方式を銀行流動性論のどこに位置付ければよいかを考えたい。

主要参考文献

Hicks, John (1989), *A Market Theory of Money*, Clarendon Press. (花輪俊哉・小川英治訳 (1993)『貨幣と市場経済』東洋経済新報社)

掛下達郎 (2002)『管理通貨制度の機構分析 —アメリカ編—』松山大学総合研究所所報 第39号。

川合一郎 (1965)『信用制度とインフレーション』有斐閣。(川合一郎 (1981)『川合一郎著作集 第五巻』有斐閣, 所収)

川口慎二 (1961), 『銀行流動性論 —現代銀行論の基礎—』千倉書房。